

## 豪徳寺輪読座

### 熊沢蕃山『三輪物語を読む』

附：『大学或問：わくもん』（経世済民論）

### ご案内

以下に陽明学と朱子学の相違の概略を記します。輪読のための参考としてください。それを読んでいただくにしても、「難しいこと」と「知らないこと」を混同してはいけません。「難しいこと」は、未だに人間が解決できていないことで、その解決には編集による創出が必要です。「知らないこと」は、かつては常識であった人名や用語などで、現在では常識のアーティストの名前やスイーツやファッション、メイクの用語と同じと考えればよいだけです。これらも時代が過ぎれば、「知らないこと」になるでしょう。朱子学と陽明学がどう違うかなどということは、幕末・明治期を生きた人々にとっては常識で、その情報を補えば済むわけです。ちょっと、19世紀の日本人が常識とした朱子学と陽明学の常識を補っておいてくださいませ。とはいえ、バジラはかなり書き過ぎます。面倒と思われるところは読みとばし、最終章の「熊沢蕃山とは誰か」をお読みください。

尚、論読するテキストは、輪読の当日、配布いたします。輪読座は参加者の読みまわしで発声し、それを耳で聞いて理解することを重視します。その理解力は誰にでも備わっているので、ぜひ理解力を発揮する快感を味わっていただきたい。さらに論毒座では、予習を禁止します。予習は様々な研究者の言説の受け売りになりやすい。輪読座では、誰かの意見を選択するのではなく、自分で読み、他の輪読者が読む言葉と目で読み取る文字の相互作用が引き起こす理解の過程を楽しみたい。加えて輪読座では、テキストの読み違い、読み方の良し悪しを問題にしない。あくまで論旨を把握することを重視します。そのために、輪読の半ばに休憩を儲け、それまで読んだ内容(コンテンツ)を、誰かに説明するための図解を作成していただきます。そこには、これまで誰も考えたことがなかった独創的な解釈が顕れることがある。それこそが「無知の知」、すなわち「独創」であって、輪読座ではまずは「独創」を讃えたい。

但し、輪読する書物が書かれた時代と現在では、自然・社会・経済・文化・外交等の環境が異なり、現在では使用されない術語も多く、それらが理解の妨げになります。これらの障害は輪読師が独自の図解や年表、書物独自のコンセプトの解説などによる「図象」(ずしょう)によって解消しつつ読み進めていきます。どうぞ、ノートと筆記用具、五感と頭脳のみを携えて、輪読座にご参加くださいませ。

## 1. 朱子学の構築

### (1)世界存在の程顥(ていこう)と観察者の程頤(ていいい)

儒学に朱子学と陽明学があるのをご存知の方もお有りのことと思います。朱子学は、日本の平清盛(1118～1181)、源頼朝(1147～1199)が活躍した12世紀後半、中華亜大陸の南宋の朱熹(しゅき:1130～1200)が構想した儒学の体系です。この時代の中華亜大陸では、黄河流域の華北を満州族(女真族)の完顔部(わんやんぶ)の首長・阿骨打(あくだ)、すなわち、完顔阿骨打が建国した「金国」、揚子江流域に「南宋」が対峙していました。この頃、モンゴル高原にチンギスハーンが台頭し、中央アジアを制覇して「金国」に挑もうとしていたのです。平清盛は、このような国際情勢の中で、「南宋」との交易路を開き、王朝の経済を担って台頭し、藤末鎌初には朱熹の活動や思想の一端が日本に伝わりました。

朱熹は若いころ、禅宗に帰依したが、北宋の程顥(ていこう:1032～1085)・程頤(ていいい:1033～1107)という兄弟哲学者の学問を引き継いだ李延平に出あって師事し、儒教に転じたという。程顥(ていこう)は官僚を養成するための科举合格の学問(宋の訓詁学)を嫌い、「万物一体思想」を深め、陰陽二気による宇宙生成論を構築し、自然現象の法則を「理」とし、「理」を直感的に把握し行動することを「仁」(愛の理)とした。弟の程頤(ていいい)は、兄の物事を超越した行動を観察し、兄のように自然法則を直観的に行動することは困難とし、それを客観的に解析するプロセスを確立しようとした。すなわち、「一物」(宇宙の部分として顕れた存在)の「理」は宇宙全体の「理」と同一とし、客観的な対象の観察によって「理」を把握できるとしました。そのプロセスが「理解」です。これは東洋の客観哲学、客観科学の開始でした。

この程頤(ていいい)の学問を発展、充実したのが朱熹(しゅき:1130～1200)の朱子学で、物理・数理・心理を究め、その「理」の統合によって、心身・家族・地域・国家の安泰をはかることができるとしました。これを「窮理」(きゅうり)といい、その理解のプロセスを「道」(どう)とし、その結果、「仁」を発動できるとしました。この「道」を中世の日本人はあらゆる「芸」を究めるプロセスにあてはめました。「武芸」に「剣道」、茶に「茶道」、花に「華道」などとして、朱子学の「道」を世俗化し、認識の究極を求めるところに、人生の「道」を求めました。あるいは、地域的・階級的・職業的に発生した社会原理を「道理」と呼んだりしたのです。現在の口語に残る「どうりで・・・」というのは、知らなかった原理・体系を説明されて納得したことを示します。

### (2)朱子学のスローガン「格物致知」(かくぶつちち)

それはそれとして、朱熹は、「道」のプロセスを漢代に編集された『礼記』の中的一篇、『大学』に「致知(ちちは)在格物(かくぶつにあり)、物格(ぶつかくは)而(しこうして)知至(ちしなり)」という一句に求めました。漢文には動詞の活用や助詞の表示がなく、それを読むときには、頭の中でそれらを想定して読みます。ですから、「格物」や「致知」も動詞の読み方、助詞の想定によって様々に読めるわけです。この句は、朱熹が解釈するまで大した意味があるとは考えられていなかった。

朱熹は、日本語に訳していうならば、「格」には「ただす、つとめる、いたす」といった意味があ

り、「格物」は「物をいたす」(対象の事物やそれを記した書物の内容を正確にとらえ、そこに原理を発見する)と解釈しました。「致」には「いたす、こさせる、ぎりぎりまでつくす、まじわる」などの意味があり、「致知」は「知をいたす」(知を限界まで探求しつくす)と解釈しました。それで、朱熹は人間の覚醒の第一段階を「格物」とし、第二段階を「致知」とした。これを四字熟語にして、「格物致知」とし、さらに縮めて「格致」といい、朱子学の標語(モットー)としたのです。「格物致知」なくして、人生の意義を見出すことはできず、人生を楽しむこともできないというわけです。さらに、朱熹は『孟子』を社会革命に応用しました。それを単純化していえば、君主制や身分制度は認めるが、「親を養えないような国の民は革命をおこし、国政を改めてよい」ということです。漢語の「革命」は『孟子』に初めて記された。さらに南宋は北方の金国や蒙古と対峙していたので、朱熹は「攘夷」を唱えています。「攘夷」は「夷狄」(異文化の勢力)を攘(はらいのける)ということなのです。

### (3)南宋政権に受け入れられなかった朱子学

しかし、南宋では官僚登用試験の科挙のための訓詁学が発達し、科挙合格者によって構成された官僚組織は朱熹の「道学」を受け入れなかった。しかも南宋は異民族の国に圧倒されていたので、「講和」が外交の主軸であり、「攘夷」の主張は通らなかった。革命論などはもつてのほかでした。こうした状況に、朱熹は生涯のほとんどを、烏龍茶の産地として名高い福建省の武夷山中の古き神を祀る社(やしろ)の祠官(神職)として過ごし、古来の地域共同体であった「社稷」(しやしよく:地域の神を祀る社を中心とする生産共同体)の振興に尽くし、北方の金との戦争や内乱がおこれば、難民救済に乗り出し、天災に備えて地域共同体が経営する備蓄倉庫「社倉」の設営に奔走している。

1179年、朱熹は廬山(ろざん;南京郊外の景勝地)の白鹿洞書院を復興しました。白鹿洞書院は唐の文人・李渤(りぼつ)が自邸に設けた白鹿洞書齋に始まり、五代十国の呉国王が儒学を振興する学校とし、北宋の2代皇帝・太宗が儒家典籍を授けた儒学の殿堂でしたが、南宋時代には廃墟となっていた。朱熹は、白鹿洞書院を拠点に程顥(ていこう)・程頤(ていい)の学統の振興をはかり、それをめぐる議論を巻き起こしました。

1189年、北方の金国と対等に渡り合い、朱熹に一定の敬意を払った南宋皇帝・孝宗が没し、暗愚な光宗が即位するとクーデターがおこり、寧宗が擁立された。寧宗は独裁体制を敷き、政治顧問となっていた朱熹は40日で解任され、クーデターに加わった朱子学親派は追放された。1196年、朱子学は「偽学」の烙印を押されて弾圧され、朱熹の著作は発禁となった。朱熹は不遇の中で、みずから定めた「道学」の基礎経典「四書」(『論語』『孟子』と漢代に儒者の論考を編集した『礼記』の中の『大学』・『中庸:ちゅうよう』の二篇)に注釈し続け、1200年に没しました。この『四書集注』は、後世に朱子学を伝える典拠となったのです。

朱子学は南宋では弾圧されましたが、日本では鎌倉末期から室町時代に民間に流布し、神道や芸能に応用されました。日本語の「〜致(いたし)します」という丁寧語は「精一杯努力し知を発揮して解決します」ということで、「致知」が日常化されるまでになったのです。あるいは、朱

熹の曾孫、朱潜(しゅせん)は南宋がフビライハーンに滅ぼされる直前の 1224 年、高麗に亡命し朱子学を韓半島にもたらした。フビライハーンは南宋を征服して元朝をおこし、南宋王朝の政策を批判した朱子学の徒を用い、南宋遺民を服属させました。

元朝を万里の長城の北に追いやった明朝では、永楽帝(在位:1402~1424)が朱子学のすべての解説書を収攬した『四書大全』『五経大全』『性理大全』を編纂。朱子学を官学化し、科挙の学問としました。こうなると、朱熹が目指した原理探求という趣旨は衰え、博覧を基礎とする学力が重視され、朱子学書の解釈をめぐる党争が発生するようになります。

とはいえ、20 世紀後半の研究では、17 世紀から 18 世紀に朱子学が西洋に伝わり、西欧合理主義、科学思想が発生したと考えられるようになっていきます。紀元 2000 年1月発行の「タイム」誌は近代社会形成に功績があった 1000 人を特集し、東洋人で唯一選ばれたのが朱熹でした。こうしたことから、朱熹は世界の客観哲学、そこから派生した科学思想の祖として、西欧でも認められていることが分かります。

## 2. 陽明学の発生

### (1)明代朱子学の空洞化

朱熹は、「格物致知」が発動されるには、「中庸」(ちゅうよう)が必要であるとしていました。『論語』のなかで、孔子は「中庸の徳たるや、それ至れるかな」とし、「過不足なく偏(かたよら)ない」精神状態としている。人間は、環境・社会・情報に左右されて生きている。今でも、真実と言たって、学校で習ったから、世の中で大勢を占めているから、誰かから聞いたから、ニュース番組で報道していたからとかいって、その根拠などはそっちのけで、真実と思っていることが多い。

これらは真実探求のための「格物」や「致知」にとって弊害になる。自分が信じていることが何によってもたらされたのかを確認し、根拠のない真実は消去しなくては判断が狂います。その真実と確認された原理に従って発言・行動するための精神状態が「中庸」ですが、これを保つのはなかなか難しい。

朱熹は『礼記』の中的一篇『中庸』に、「中庸」の精神状態を「誠」としていることに着目し、「誠」を宇宙発生原理が体得された精神状態としたのです。それで、世の中の情報に左右されなれない、いわば人間独自の純粹精神「性」とし、欲望を巻き起こす雑念を「情」とし、物事を判断するとき、「情」を排除し、「性」を保持する「静坐」の方法を定めました。

しかし明代の朱子学は「静坐」を忘れ、「中庸」を怠り、欲望の実現と真理の実践を混同するようになった。明朝 11 代正徳帝(在位 1506~1521)の時代には、朱子学が科挙の学問となって、その内実が空洞化し、ダライ・ラマ体制が俗世間での布教・実践を禁じたチベット密教などが流行した。これは現代の客観主義、科学主義に基づく社会にも顕著に現れる、奇妙なエゼ密教やエゼ神秘主義の流行に極めて似ている。

### (2)王陽明の「龍場の大悟」

そこに朱子学を究めようとした青年が現れた。それが王陽明(1472～1529)です。王陽明は将来の動乱を予測し、武術、兵法に打ち込み、朱子学を習得し実践しようとした。ところが、その基本となる「格物致知」を成し遂げられなかった。朱子学では万物に「理」があるとし、「静坐」によって「中庸」を保ち、対象を観察すれば、「理」を究められるとする。王陽明は竹林に「静坐」して竹の「理」を究めようとして七日、「中庸」を保てども、そこに「理」を汲み取れないまま気絶したという。

それでも、王陽明は朱子学の文献に詳しくあったから、1507年、科挙に合格し官僚となりました。その頃の朝廷は「八虎」と仇名された八人の宦官の首魁、劉瑾(りゅうきん)に専断されていたのです。劉瑾は若くして即位した正徳帝にチベット密教の悟りへの道とする性的逸楽を勧め、遊蕩に耽溺させて政権を操り、スパイ組織を構築して反対するものを暗殺し、重税政策、賄賂政治を推し進めたので、各地に反乱が勃発した。王陽明は劉瑾排除の弾劾文を正徳帝に奏上し、貴州省北部の蛮族(南方の異民族)の地、龍場駅の駅長に左遷されたのです。劉瑾の暗殺の手を怖れた王陽明は三人の従僕を連れ、鍾乳洞を根拠地とし、そこを「陽明小洞天」と名付け、同士とともに起居した。地元の人々の食物の寄進に頼っていましたが、飢えに苦しみ農地を開き耕作し、自立した生活を始めたのです。こうした状況に同士が過労で病に倒れていき、陽明は薪を採り、水を汲み、粥を作って食べさせ、郷里の歌を唄って慰めた。その頃、王陽明は日夜、端坐澄然して静一を求めるうちに、胸中が洒然(しゃぜん:はさっぱりして物事にこだわらない心境)となった。その究極の精神状態にあつて、王陽明は朱子学とは異なる儒学の道を悟ったという。これを「龍場の大悟」という。

その悟りの内容とは、聖人の道は観察される外側にあるのではなく、すべては観察する自己の「性」の中にあり、「理」を観察される外の事物に求めてきた朱子学は誤りであったということでした。すなわち、主観があつて、客観が生じるというわけです。そこで、王陽明は朱熹が施した「四書」(論語・孟子・大学・中庸)の注釈を書き換え、五経に照らし合わせて、『五経臆説』(五経=『詩経』・『書経』・『礼経』・『易経』・『春秋』)を著し、陽明学の基礎としたのです。

### 3. 朱子学と陽明学の主な相違

#### (1) 「格物致知」の解釈＝「情報集積による知」と「幼な心の認知」

「格物致知」を朱子学では、日本語で書き下すなら、「物に格(いた)りて、知を致(いた)す」とし、この「格(いた)す」は「見たり、聞いたり、触ったり、書物で知ったりして対象の情報を整理し、明瞭にとらえること」、「致(いた)す」は、「ぎりぎりまで追求すること」で、「格物致知」は「事物を観察し、知を究める」と解釈されます。「知を究める」とは観察対象に原理・法則を発見することで、これを「窮理」とし、「窮理」のプロセスを「道」としました。

陽明学では、「格物致知」を「物を格(ただ)して、知を致(いた)す」と解釈しました。この「格(ただ)す」は、事物は自然環境・社会環境、時代特性などによって、さまざまな意義を与えられるので、「心を正常にし、正しく捉えること」です。その「致(いた)す」は「そのまま致(いた)る」といことで、人間に備わっている「認知」を正常に働かせれば、そのまま知に至るとする。このような人

間に備わる認知を「良知」という。その「良知」を確認することが個々の人間の発展の基礎となるとし、その実践を「致良知」(良知を致す＝良知に至る)としたのです。

今時に照らせば、朱子学は経験や読書を重ねて窮理による「道」を究めて、やっと正しい行動が可能になる。それでは正しい判断による行動は少数の老人となった聖人にしかできない。これを批判して、陽明学は人間には本来「良知」が備わっているから、それを確認する方を先決とする。これは情報集積や経験値に関わらず、誰でも可能な行動原理となったのです。

## (2) 儒学の三綱領の解釈＝聖人が救済するか、人びとが目覚めるか

『礼記』の一篇、「大学」には、儒者が果たすべき綱領が三位一体で示されています。すなわち、「明明徳」(明徳を明らかにする)、「親民」(民に親しむ)、「止於至善」(至善に於いて止る)です。まずは人間に備わる徳を明らかにし、民に親しみ、善に至ってそのまま生きるというわけです。朱子学では、「親民」の「親」が「新」と同じ発音であることから、「親民」は実は「新民」(民を新たにすること)であると解釈し、「朱子学によって知識を積み重ねた聖人君子が人民を導き、人民の生き方を刷新する」としました。これに対して、陽明学では「親民」は文字通りの意味とし、「陽明学の聖人は民に親しみ、ともに良知を共有して共同体を形成し、それに基づいて未来を切り開く」とした。

## (3) 聖人とは誰か＝天人合一か、万物一体か

朱子学では、聖人は読書・修養によって人欲を取り除いて到達すべき目標とされる聖人への道が開ける。知識を積み重ね、修養して聖人になる。朱子学では、心を「性」と「情」に分け、「性」を天から賦与された純粋な善性とし、「情」は欲望を生じさせる感情とします。それで、「性」は「理」、「情」は「人欲」とし、「天理を存し人欲を去る」とする。すなわち、「性即理」とするので、修養によって「人欲」を除かないと、聖人にはなれない。従って聖人になろうとする君子が家族を導き、地域、国家を導き、ひいては天下を統治するとしてきました。これは人間が「性」を介して「天」と合一するという「天人合一」の理念を広めました。

陽明学は人間に本来備わる心を「良知」とします。「良知」を発揮する人は誰でも聖人とする。すなわち、心そのものを「理」とし、「心即理」を唱えた。従って陽明学は基本的人欲を認め、人欲があつてこそ聖人としてきました。さらに朱子学が性善説を主張するのに対し、心は善悪という相対的な価値観を超越しているとする。この心は人それぞれに独自性を生じ、それを「独知」とし、それぞれの「独知」が相互に補いあつて社会が円滑に作動するとして。そして万物が合一して宇宙を形成しているとする「万物一体」を標榜したのです。

## 4. 日本に残った朱子学と陽明学

### (1) 「講会」による朋友ネットワークの拡張と「公論」の発生

王陽明は「龍場の大悟」の後、1510年に宦官・劉瑾が王朝篡奪を謀って処刑されると南京兵部尚書などの地方の高官を歴任しましたが、正徳帝の暴政の傷は深く、明朝打倒の反乱が頻

発。王陽明は、それらの鎮圧にあたり、著作もほとんど残さなかった。しかし、王陽明は「良知」を共有する朋友ネットワークを構築し、それに加わった弟子たちが陽明の言行、手紙などを編集し、『伝習録』として出版しました。これが陽明学の聖典となったのです。

1521年、嘉靖帝(在位 1521～1588)が擁立され、その三年に王陽明は没しました。嘉靖帝の時代には、陽明学の信奉者は少なく、「北虜南倭」に悩まされ、国力は衰退。こうした国難に陽明学派の朋友ネットワークは全国各地に「講会」(公開討論会)を開催して賛同者を増やしていきましたが、その理想主義的見解は既得権者に勢力の弾圧に屈してきたのです。嘉靖 32 年(1553)、北京で陽明学派の大規模な「講会」が開催されるようになり、学徒は千人、参加者を合せて5千人が集会し、陽明学の信奉者が政権奪取の勢いを世に示したというわけです。

この朋友ネットワークは、王陽明の朋友(良知の共有者)が各地に「講学」(陽明学を講義する会)を開催し、「良知」を認知し行動する集団を形成。その集団の成員が、また「講学」を催して陽明学を伝えることで形成され、陽明の3代の弟子の時代には強力な地域勢力を形成しました。陽明学の信奉者は「良知」を認知する集団が議論して政策を発案するようになり、これを「公論」としました。

明治維新の政策方針に「万機公論に決すべし」とされ、今も日本の政治ニュース番組などで語られる「公論」という言葉は陽明学の政策議論システムから生まれた用語です。嘉靖 32 年の「講会」の主催者は、初めて陽明学徒から入閣した徐階でした。徐階は「公論」を明朝の政策決定システムに導入しようとしていました。

## (2)陽明学派による明朝復興

徐階は「講学」によって、嘉靖政権が忌避した在野の人材を掘り起こし、出身や資格によらない人格重視の官吏登用を進めました。徐階が最も引き立てたのが、徐階の弟子で、「講学」を開いて人気を博した張居正でした。張居正は、嘉靖帝が没した 1567 年、隆慶帝が即位すると入閣し、首相となった徐階とともに嘉靖帝の寵臣をことごとく追放。1572 年、隆慶帝が没すると、10 才の万曆帝を即位させ、陽明学派が内閣を運営したのです。

幼帝を擁した張居正は宮廷勢力を抑えて独裁的な手腕を発揮しました。この頃、明にメキシコ銀や日本銀が大量に流入し、銀本位経済が構成されてきたので、複雑化した税制を丁税(人头税)と地税にまとめて銀で支払う一条鞭法(いちじょうべんぼう)を定めて、税金にたかる官吏を一掃しました。あるいは科挙の合格者を出す学校を主宰して地域豪族化した「郷紳」の私有田を摘発して納税させ、各地で勝手に実施され、人民を苦しめていた枴や秤、物差しを統一する丈量(じょうりょう)を実施し、売買の不正を除きました。こうして、明の経済は大きく改善され、明王朝は復興したのです。

しかし、陽明学以外の学派を認めない言論弾圧への反発、既得権者の不満が高まり、1583 年、張居正が没すると、張居正は死刑扱いとされ、家産は没収、長男の張敬修は自殺に追い込まれ、それ以外の家族は辺境に流されてしまった。この頃青年となった万曆帝は陽明学から解放され、美術を愛して放蕩をつくり、豊臣秀吉の朝鮮出兵に援軍を送って、再び明朝の

国庫は枯渇したのです。

### (3) 陽明学派の失墜による朱子学復興

張居正一族の滅亡後、万曆帝の乱脈な政治に物申したのが、朱子学の「理」を本気で追求しようとした顧憲成(こけんせい)です。顧憲成は朱子学の立場から、万曆帝の内閣を批判し、批判が斥けられたことを理由として同志とともに辞職して故郷の江蘇省無錫(むしゃく)に帰った。顧憲成は陽明学派が台頭してきた要因に「講学」があったことを知っていました。そこで無錫の景勝地、恵山に湧き出す天下第二泉(恵山第二泉)のほとりで朱子学の「講学」を開始し、地元の支援者の協力を得て、南宋時代に程顥(ていこう)・程頤(ていい)の学問を講じた楊時(ようじ)が建設した東林書院を復興し、そこを根拠地として、朱子学の政策議論をひろめる「講学」を展開。各地の有志は「書院」(私学校)を設立し、朱子学の復興を目指しました。東林書院には反政府を標榜する人材が結集してきたのです。これは東林党と呼ばれました。顧憲成は、朝廷から政府に入るよう勧められましたが、「講学」に邁進したのです。

朱子学は従来から読書を大切にし、東林党の中から、いわゆる読書人が現れ、文学・水墨画、書などの結社を創設していきました。そこで東林党は、政治に関わる朱子学の士大夫集團の場を「党」、読書人の場を「社」とし、とくに青年文学集團の発表・批評の場を「復社」としたのです。そこから明末期の『水滸伝』、『紅樓夢』、『三国志演義』などの文学作品が出現しました。

こうして勢力を拡張した東林党は、1620年、万曆帝が没し、泰昌帝が即位すると、東林党の進士が続々と登用され、政局の刷新をはかろうとしました。しかし泰昌帝は即位後、わずか7ヶ月で毒殺されてしまった。そして天啓帝が即位すると、宦官・魏忠賢が政権掌握を目指して、東林党の主たる官僚を捕縛、追放したのです。その後、魏忠賢は政権を掌握すると、東林君子、東林七君子とされる十三君子を捕縛して殺害した。それでも、民間に深く根をおろした東林党が根絶やしになることはなかった。東林党の「党」の活動拠点の書院はほとんど廃止されたが、文芸・芸術の「復社」が政治結社としても機能し、そこから顧炎武(こえんぶ)が現れ、明が農民反乱に倒された後、反清活動を展開し、朱子学を用いて混乱する社会に対応する実証学的な研究法を開発して、経世致用の学を基本とする考証学を切り開いていったのです。

### (4) 陽明学右派と陽明学左派

天啓帝の政権が魏忠賢に奪われたとき、東林党とともに陽明学派の官僚、劉宗周(りゅうそうしゅう)も追放され、1628年、崇禎帝が即位すると、中央政府に復帰し、1632年には東林党と共同して、復興した東林書院で講義しています。劉宗周は客観・主観論争を弱め、混乱する明国の済民実学に向かおうとしました。そこに陽明学右派が形成されたのです。その弟子の黄宗羲(こうそうぎ)は実学に精通し、古来の聖人の言葉・行動を研究する「經学」や地勢・地理を研究する「地学」、「数学」に没頭し、清代の考証学の有力な学派、浙東学派の祖とされている。黄宗羲は陽明学を実学に応用し、精神論からの解放をはかった。その思索は辛亥革命を契機に「中国のルソー」と評価されるようになったのです。

こうした陽明学右派に対して、陽明学の本質である「心即理」を追求したのが陽明学の本流であって、多くが官途につかず、地方での「講学」に邁進した。万暦帝時代に陽明学派が政権を握ると、それに呼応しない陽明学本流は陽明学左派を形成していった。その思想は王陽明の弟子の二王とされる王畿(おうき)・王良(おうこん)の学説を引き継いでいます。王畿・王良の学説は、日本陽明学を開いた中江藤樹や熊沢蕃山の思索・行動に深く影響しました。

王畿は王陽明が唱えた「心即理」から、心は善悪を超えているとする「無善無悪の説」を発展させ、現実の人間をありのままに肯定する現成良知論をとり、心の本来に善も悪もないなら、そこから発する人間の営為は、すべて無善無悪であるとし、絶対自由の境地を説き、そこに儒・仏・道の共通性を見出しました。

王良(おうこん)は救世済民を目ざす実践主義を唱え、陽明の致良知説を庶民の立場からとらえ、人はすべて聖賢であり、万民の日用現在こそが道にはかならないとした。王良は学問を士大夫の独占から解放しようと、男女・生まれに関係なく、「講学」に参加させました。さらに、「致良知」だけを求めようとする陽明学を「独善」と非難し、「大学」の「格物・致知・誠意・正心・修身・齐家・治国・平天下」は誰もがめざせる八段階とし、一般庶民にもその階段が解放されているとしたのです。

横道にそれますが、王良の陽明学は身分制度が厳格な時代には儒教の異端とされましたが、日本の幕末・明治の日本では、それこそが儒学の最高到達点と賛美されたのです。近代化しはじめた日本で、王畿・王良の学説が評価されていることを知った清朝の改革派は、清朝で失われた王畿・王良の著作を日本から持ち帰り、再研究しはじめた。それは孫文の辛亥革命に深く影響しました。

## (5) 李卓吾の「幼な心」に共鳴した日本

特に王良の学統は泰州学派と呼ばれ、陽明学の極左を形成したのです。その中でも、日本の近世の庶民の思潮や江戸文芸に大きな影響を与え、幕末の思想を動かしたのが、李卓吾(1527~1602)の「童心説」です。李卓吾は内面を探求しても、「良知」に至ることはできないとし、「良知」は童子の「幼な心」に発揮されているとしました。「幼な心」は成長につれて、知識や道理によって曇らされ機能しなくなるので、「幼な心」を再確認して心の基本に据えれば、「良知」を發揮できるとしました。

李卓吾は福建省の貿易都市・泉州のムスリムの家に生まれ、南京でイエズス会のマテオ・リッチに出会って、カソリックの教義をすぐさま理解した。李卓吾の思想は唯心論に近かった。18世紀のドイツの哲学者ヘーゲルは、『大論理学』に神が下された人間の純粋な精神が地上の穢れによって「疎外」されているから、「疎外」を除いていけば、神の精神に上昇していくとする。これは西欧版の李卓吾です。

あるいは、李卓吾は朱子学が推奨する四書五経は「童心」を汚すとし、『西廂記』『西遊記』『水滸伝』などの口語文芸(白話)方が心の穢れを払うとしました。こうした李卓吾の言説は陽明学徒からも異端とされましたが、明清交代期の17世紀に李卓吾の『焚書』『蔵書』『続蔵書』な

どの著作とともに、多くの陽明学の書物が琉球経由で日本に輸入され、日本陽明学に導入されたのです。

明の朱子学や陽明学右派は清朝の形成期に、それぞれの思想の根拠を捨てて合流し、実証に基づく「考証学」を形成しましたが、陽明学左派は異端の烙印を押されて忘れられ、その書物は日本にもたらされて民間に根つき、幕府の政策批判の論拠に用いられ、近世庶民の感情・倫理に溶け込んでいったというわけです。

## (6)陽明学左派、近世日本の庶民文化に浸透

江戸幕府は朱子学を官学として採用し、陽明学で諸藩の問題を解決しようとした熊沢蕃山を弾圧しました。1700年に寛政異学の禁が発せられ、朱子学による思想統合が推進される中で、浮世絵や草紙本などの庶民芸術、庶民文学の規制が強化されました。こうした世情に対抗して、上田秋成の医学の師であり、白話文学の祖ともなった都賀庭鐘(つがていしょう)は、李卓吾の文芸評論書『開卷一笑』を読んで、その趣旨に沿って『英草紙』(はなぶさそうし)、『繁野話』(しげのばなし)などを出版。日本白話文芸を創始しました。これが関東に伝わって、滝沢馬琴らの読本の文学となるのです。

上田秋成も朱子学が示す学問、孝行や忠義を批判する『旌孝記』(せいしょうき)を著し、そこに李卓吾の『焚書』の「童心説」などからの引用をふんだんに加えています。例えば、四書五経を読む家族に不孝者は多く、そんな書籍を読まない貧乏人の方に孝行な子供が多いなどという議論に、『焚書』が引用されている。そこでは、心は朱子学がいう「情」を捨てた天理の「性」では働かず、心は「情」によって働くとした李卓吾の反朱子学論が吐露され、上田秋成の文学は反朱子学的な陽明学文学として読む必要もあるわけです。いずれにせよ、近世後期には陽明学左派の思想は庶民の中に溶け込んでいました。

## 3. 熊沢蕃山とは誰か

### (1)熊沢左七郎の出発

江戸幕府の将軍となった徳川家康は神社を守る武士団(神人)の解体をはかりました。熊沢蕃山(1619~1691)の幼名は左七郎といい、京都稻荷大社の神人だった野尻一利と水戸藩主徳川頼房に仕えた熊沢守久の娘の間に生まれ、父は浪人となり、母は左七郎とともに、江戸の熊沢守久邸に身を寄せ、左七郎は熊沢姓を名乗った。この左七郎が熊沢蕃山になっていった。熊沢左七郎は利発な少年でした。長子相続制が定められた大名の家では愚かな跡継ぎが育つことが最大の問題で、身分を問わず利発な少年を探して跡継ぎが世話する相手をつくり、学友として面倒を見させ、寛容や思いやりを養わせた。

1634年、熊沢左七郎は岡山藩主池田光政(1609~1682)の兒小姓となっている。少し横道にそれますが、光政の祖父の池田輝政は戦国末期の猛将で、関が原合戦後、姫路藩初代藩主となった。1613年、輝政と共に戦い続けた嫡男、利政が姫路藩2代藩主となり、岡山城代を兼任したので、池田光政は岡山城に誕生したのです。利政は大阪の陣に出陣し 軍功を挙げた

が、1616年、33才の若さで義弟の宮津藩主・京極高広の京都四条邸で病死してしまった。わずか8才で家督を継いだ池田光政は鳥取藩に転封された。家臣は大幅な減俸となり、藩主光政は江戸屋敷にあって、鳥取藩政は老臣衆議で執行され、政務は家老日置豊前と土倉市正が担当しました。叔父の岡山藩主・池田忠雄が死去し、嫡子の光仲は幼少だったので、鳥取藩に移封され、鳥取藩主池田光政は岡山城に入りました。

初めて藩主として現地のトップに立つ池田光政の不安は大きかった。藩の首脳陣は池田軍を指揮して戦い続けた歴戦の勇者で、鳥取藩を経営してきたのです。しかし世は武断から文治へと転換しなくてはならなかった。孤独な光政の心を思って京極高広は熊沢左七郎を光政の児小姓に推挙したのです。左七郎は江戸の岡山藩邸に出仕し、出府する主君の稚児小姓として過ごし、ともに将来を語り合ったのです。

1638年、左七郎は元服して、名を伯継（しげつぐ）、**室**(あざな)は了介、通称は次郎八とし、後に助右衛門と改めました、この時、島原の乱がおこり、助右衛門は島原参戦を願い出て受け入れられず、浪人して母の実家(近江八幡市)に身を寄せ、朱熹の『四書集註』を読破しました。助右衛門は軍功による出世を断念し、学問によって将来を切り開こうとしたのです。

## (2) 中江藤樹に入門し陽明学を实践

1642年、熊沢助右衛門は琵琶湖の西岸、近江高島郡の小川村に私塾を開いていた中江藤樹の噂を聞き、藤樹を訪ねて受講を許されました。この頃、陽明学という呼称はなく、藤樹は「心学」と称していました。朱熹は「性」と「情」を分け、「情」を捨てて、「性」の「理」を把握することによって君子、聖人となり、それが政治を司ることで天下泰平を実現できるとしていたので、全国統一をなした江戸幕府は朱子学を官学としたのです。それで、明代に「性」に「情」を一体と考えて「心」とし、その「心」を「理」とする学派があつて、明代に政権を取ったものの、異端として排除されたというのが幕府の見解となっていました。

この頃、中華亜大陸では大旱魃が発生し、李自成が闖王(ちんおう)と称して農民軍を率い、洛陽に迫っていました。1644年、闖王は西安に入り、大順王と称して大順国を建国。大順国軍は、その3月、北京を攻略し、明の崇禎帝が自殺して明帝国は滅亡しました。大順王は皇帝即位の儀式を整えましたが、満州族の後金国の軍勢が三海関を守備する呉三桂と共謀して北京に乱入。大順王は湖南に逃れたのです。

こうした明帝国の腐乱した政治による動乱に、朱子学を究めようとしていた藤樹は、明の朱子学の党争を知り、これに反対した陽明学派の哲学に目を向けました。そこで陽明学派の解説文書を手に入れ、その方法を「心学」と称して小川村で実践し、その有効性を試していたわけです。それによって小川村の家族は相和し、村人は共同して農業・産業にいそしみ、公共事業や藤樹塾の授業や経営も村人が積極的に行ない、近世村落の理想を実現しているかのようでした。それが評判となり、参勤交代の途次に訪れる大名も多かったです。

藤樹は、まだ王陽明の著作を手に入っていなかったのですが、1644年、陽明の著作・言行録・

手紙・手記などを網羅した『王陽明全集』を入手した藤樹は、「是年、始テ『陽明全集』ヲ求得タリ。コレヲ讀デ、甚ダ觸發印証スルコトノ多キコトヲ悦ブ。其学弥(いよいよ)進ム」と記しています。藤樹は弟子とともに『陽明全集』をひもとき、その方法を確認し小川村で実践したのです。

### (3)岡山藩に招かれる

岡山藩主となった池田光政は、老臣に頼っては将来が開けないと考え、1641年、岡山城下の花畠(岡山市中区網浜)の別邸に花畠教場を開き、次世代を担う有能な藩士を集めて政策立案に関する議論を始めました。こうして、ともに岡山藩の将来を語った家臣が岡山藩の首脳陣を構成する時を待ったのです。京極高広はかつて児小姓として仕えた熊沢左七郎が助右衛門となって、中江藤樹門下に才能をあらわしていると知り、池田光政に伝えました。1644年、池田光政は熊沢助右衛門を花畠教場に招いたのです。助右衛門は、花畠教場に集まった家臣に「良知」による実行を約束させる「花畠盟約」を結ばせ、陽明学の「講学」を開始し、中江藤樹先生を招くよう勧めました。

この頃、天海僧正の発案で徳川家康の御魂の薬師如来の垂迹、東照大権現として祀られ、その宮号が天皇の許可を得るための交渉が幕府と朝廷の間で進められていました。1645年、後光明天皇の宮号宣下があり、東照大権現は東照宮と称することになったのです。池田光政は東照宮の勧請によって、幕府から睨まれていた陽明学の採用による障害をやわらげ、同時に東照宮建造体制に新世代を登用し、次世代の藩政を担う若き藩士の姿を藩民に知らせようとしたのです。東照宮勧請計画に反対する家老はなく、光政は大老の酒井忠勝の許可を受け、天海僧正に遷座を申し出て快諾されました。

これは最初の東照宮遷座となり、1645年に着工しました。その大規模な工事にあたって、戦国の池田軍団を勝利させ続けた武将で、家老を仕切ってきた池田由之の後を継いだばかりの池田由成(よしなり)を大奉行とし、光政体制を世に示す建設組織が組まれました。こうして、藩の人事を刷新した光政は、1647年、参勤交代の途次、近江小川村の藤樹塾を訪れ、中江藤樹を招聘しようとしたのです。しかし藤樹は、すべてを熊沢助右衛門にまかせるよう説得し、長男を学校奉行に派遣しましたが、早世したのです。

### (4)花畠教場に教授し、山林復興による治水事業推進

熊沢助右衛門は花畠教場の教授に集中しました。それは王陽明が始めた「講学」にそっくりでした。花畠教場は岡山藩の公的教育機関ではなく、熊沢蕃山などを中心とした私的な学習結社となり、藩士から選抜された学生は「致良知」の自覚し、「知行一致」の行動をおこし、生涯に渡って「朋友」であること誓いあったのです。こうなれば、学生同士が藩の問題を析出して議論し、対応策を検討し実行に移していこうとする。これを藩主光政が採用し、花畠教場の学生を用いて実行するわけです。

手ごたえを感じた藩主光政は、慶安33年(1650)、熊沢助右衛門の「花畠之内ニてさくまい(作廻:差配する)」に対して、三千石の物頭の役職を与えた。これは驚くべき高給で、上級の

家臣の反発は大きかった。このころから「花島」に「心学」を学習する藩士や牢人が集まるようになった。これは、明の陽明学徒・徐階が宰相に就任したときに催された「講会」に相当し、熊沢助右衛門はその集会の規約「花園会約」(かえんかいやく:建学の基本原則)を起草。それは「心学」を基盤とする政治のマニフェストでもあったのです。

この頃の城下町は脆弱でした。幕府が推し進めてきた一国一城令は各藩の城下への人口集中をおこし、築城、城下町の造作に大規模な森林破壊がおこり、干拓地や扇状地、湖水や沼地に造成された城下町や新田を大水害が襲うようになったのです。岡山藩でも、備前を縦断する大河、旭川が氾濫し、大災害をおこしました。これは現代におこっている風水害と全く同じなので、熊沢蕃山の治水が脚光を浴び始めている。

熊沢助右衛門は、それまで推奨されてきた堤防の砂止めなどを無意味とし、原因を山林破壊にあるとしました。山林破壊によって山土が流れ出し、土砂は川底に堆積して天井川となり、河口を埋めてしまい、ちょっとした集中豪雨で河川が氾濫する。山林復興は営々と続けるが、緊急対策として旭川の氾濫地点に放水路、貯水池を設けて水門で管理し、河口を浚渫。河川の高低差を回復して川底の土砂が流れ下るように河川工事をすすめました。

これは灌漑と舟運の便宜を図るとともに、洪水を逃がす遊水面積を広げることとなり、その工事は家老を指揮官に立て、熊沢助右衛門に心酔した津田永忠率いる花園会出身者が現場監督となって、テクノクラートを組織化して実行しました。助右衛門は森林が再生されるまで、新田開発を禁じたのです。干拓による豊かな岡山平野が出現するのは、藩主光政を継いだ綱政の時代になってからで、その総指揮官を津田永忠が勤めました。この頃、熊沢助右衛門は儒学書を環境哲学的に論じた『大和西銘』を著しています。助右衛門は、朱子学が「仁・義・礼・智・信」を人間に備わる五徳としたのに対して、それらが万物に備わっていると、自然環境を個々の要素が有機的に構成された生命体のように考えました。これは陽明学の「万物一体」を独自に拡張した論理でした。

## (5)熊沢蕃山の追放

岡山藩主池田光政は「花園会」に学んだ藩士や熊沢組下の家臣を民政の最前線に投入し、領民を直接指導する役割を与えました。その間、慶安4年(1651)、将軍徳川家光が没すると、油井小雪が浪人救済策を訴えて江戸に反乱をおこし(慶安の変)、幕府に衝撃を与えました。これは将軍家光が大きな外様大名の改易が続いたことに原因があります。

将軍家光を継いだのが、11才の家綱でした。この幼少の将軍を補佐したのが、前将軍家光の異母兄弟、会津藩主・保科正之でした。保科正之は朱子学に基づく文治政策を目指し、山崎闇斎を顧問に招き、朱子学を根幹にすえた吉川惟足(よしかわこれたる)の吉川神道を支援し、幕政の文治化をはかりました。一方で、慶安の変に由井正雪が紀州藩主・徳川頼宣(よりのぶ)の印章文書を偽造したため、頼宣は事件の黒幕と疑われました。あるいは浪人が徒党を組んだのには、「心学」の影響があるとされ、池田光政・熊沢助右衛門に思想的黒幕の疑いがかけられたのです。さらに文治一辺倒な保科正之の政権を批判し、「武士道」を説いた幕府の朱子

学者、軍学者の山鹿素行を赤穂に流罪としました。

こうしたことから、岡山藩に対する幕府の圧力が高まり、熊沢助右衛門への藩内の守旧派の家老らとの対立が険しくなった。そこで熊沢助右衛門は、明暦3年(1657)、岡山城下を離れ、知行地の和気郡寺口村に隠棲し、植林によって豊かになった寺口村を、蕃(しげ)る山の村、蕃山村(しげやまむら)と改称し、みずからの号を「蕃山」としたのです。

## (6)浪々と思案の日々に「神道」を発見

万治元年(1658)、熊沢蕃山は京都に移り私塾を開き、「講学」を開始。万治3年(1660)には豊後の岡藩の招聘を受け、豊後竹田に赴き土木工事を指導。寛文元年(1661)、京都に戻って「講学」を再開すると、多数の武士・町人・貴族の家人など、身分・男女に関わらず「講学」に参加し、蕃山は名高くなった。ここに幕府の警戒は強まり、京都所司代は蕃山を京都追放処分としました。蕃山は吉野山に入り、さらに山城の鹿背山に隠棲しました。蕃山がただ安穩とするわけもないから、これは思案の日々であったにちがいない。

寛文9年(1669)、51歳の時、幕命により播磨の明石藩主松平信之の預かりとなり、藤原鎌足の長男・定恵が開基した太山寺(現神戸市)に幽閉されました。その時、生命的宇宙発生から自然、人間の生成、人間の自然の付き合い方、自然を開発するときの心得、自然災害への対処法などを記した『集義和書』を出版。これは寛文12年(1672)に出版され、その続編として国土経営の基本を山・川・森を治めることとした『集義外書』を、延宝7年(1679)に刊行。

そこでは、朱子学が万物に「理」があり、その「理」は「天理」(宇宙の法則)と同じとしたのに対し、蕃山は、万物は太虚に生じるが、それぞれ何か欠落しているという。そして人間のみが太虚のすべての要素を備えているとし、それを發揮して自然に取り組むべきだとします。これは人間優越論ですが、人間はいわば自然の有機的全体を理解して自然を制御しなくてはならないとする。これも蕃山の陽明学の拡張でした。こうした陽明学を拡張したところを、蕃山は「神道」としました。宇宙の始原の「太極」、宇宙の生成に生じる時空間とそこに充満する生成物の総体である「太虚」と並ぶ第3の本質を、蕃山は「神道」としたのです。

延宝7年(1679)、明石藩主松平信之は大和郡山藩に転封となり、蕃山は阿弥陀の靈験で知られる矢田山(大和郡山市)に移住させられました。この大和在住の間に、蕃山は三輪明神を崇敬し、自筆原稿や陽明学書を三輪神社に預けました。その中に『三輪物語』があります。『三輪物語』は、仲秋の名月の夜、三輪山麗に社家・禰宜・公達・居士らが集って座談する設定のレーゼ・ドレマです。神仏儒の是非・礼楽の盛衰・君王の徳・宗廟社稷の由来などを説き、政治の頹廢・文化の衰微を憂え、日本文化の基層となった宮廷を盛時の姿に再興させたいという願いが込められています。いわば、「日本の本来」を訪ねようという。それには陽明学を拡張した「神道」を必要とするというわけです。

## (7)『大学或問』と古河幽閉

貞享3年(1686)、熊沢蕃山は『集義和書』、『集義外書』を編集的に圧縮した『大学或問』(だいがくわくもん)を脱稿しました。これは君主の責務、治山・治水への提言、農兵論、貿易振興論、参勤交代の緩和などが22ヶ条に集約されています。蕃山の弟子たちは幕藩政治の現状を打破する行政改革案として、『大学或問』を幕府に上申したのです。ことに貿易自由化、武士の屯田兵化、参勤交代批判などが幕閣の怒りを誘発し、蕃山は幕命により松平信之の嫡子の下総国古河藩主松平忠之へお預けとなり、城内に禁錮されました。

このとき、古河藩のために蕃山堤(ばんざんづつみ)のアイデアを提供したという。

古河城の西、渡良瀬川と思川が合流する付近は標高が低く、川が蛇行し洪水が頻発しました。その付近に蕃山堤と呼ばれる堤防が築かれている。それは崩れると集落が被災するところの堤防は知恵をしぼって強化し、後背に低地や湿地があるところでは堤防を低くし、洪水のときには低湿地に洪水を流し、両方のバランスで洪水の被害をくいとめられるように工夫したのです。そして蛇行する川の一部を直行させ、川底の土砂を流し、残った蛇行部を灌漑用の溜池として旱魃に備えました。古河市の関戸に「蕃山溜」が残されています。

このように、流刑・禁錮の身の上にあっても、蕃山は国を支える村落救済には、それに応じたのです。元禄4年(1691)、熊沢蕃山は古河城の配流所に没しました。

蕃山追放後の岡山藩はどうなったのか、蕃山の日本陽明学はどのように復活し、幕末維新にどのような影響を与えたのか。それは現代の我々にどのように影響しているのか。こうしたことも含めて、日本陽明学の全貌は輪読会で明らかになるでしょう。そして熊沢蕃山の思索の結果が、現代の我々にも息づいていることが再確認されるでしょう。

それは「教育勅語」以降には忘れられた「日本の本来の行動の美意識」を、自信を持って再確認できるでしょう。

皆様、どうぞ振るってご参加くださいませ。